



たかまる通信 第6号

2004.11.02

【討議資料】

発行

福岡たかまる後援会

TEL 0952-30-0555

e-mail takamaro@takamaro.jp

ホームページ: www.takamaro.jp

先入観をすてて、
ありのままの
姿を見る大切さ

「たかまる通信」も6号を迎えました。

今号では9月に訪問した「中国」について特集しています。市場主義経済を取り入れ、急速に経済成長を遂げている中国。私にとって、初めての訪中でしたが、私の想像とは全く違う社会がありました。まさに、「百聞は一見にしかず」。先入観を捨てて、現実を直視することの大切さを感じました。

何事においても情報収集は大切なもの。しかし、これだけ情報が氾濫する時代には最終的に頼りになるのは自分自身の「眼(=判断する力)」ではないでしょうか。その力を磨けるように、いろいろな経験を積んでいきます。

特集! 中国訪問記

~その急速な変貌を目の当たりにして~

特集! 中国訪問記

~その急速な変貌を目の当たりにして~



国名	中華人民共和国
面積	960万km ² (日本の約26倍)
人口	12億8,543万人(2002年現在)(日本の約10倍)
首都	北京
人種	漢民族(総人口の92%)及び55の少数民族
言語	漢語(中国語)

隣国でありながら、なじみの薄い中国。もともとは、漢字など日本も中国から多くの文化を取り入れてきた経緯があるにもかかわらず、いまや「近くて遠い国」になってしまっています。たしかに、総理の靖国神社参拝や尖閣諸島問題、身近なところでは日本における中国人犯罪の増加や、サッカーの試合における中国人サポーターの日本に対するブーイングなど、両国間にはスタンスの違いや、感情的なわだかまりがあるのは事実です。

しかしながら、人口約13億人(世界の約5人に1人は中国人)といわれ、面積も960万km²(日本の約26倍)もある巨大な隣国「中国」がいまや急速な経済成長をとげており、日本にとっても無視できない存在であることは誰の目から見ても明らかです。

2003年の経済成長率が9.1%。BRICS(ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカの頭文字)という今後の世界経済を担うとされる一国にも数えられるほど進展著しい中国を実際に見てみたいというのが今回の訪中の目的でした。

9月14日から22日まで、北京、西安、杭州、上海と四都市を回りました。私が見たのはごく一部に過ぎませんが、そこで感じたことをご紹介します。

故宮 明・清王朝の政治の中心。72万㎡もの広さをもち、700を超える建物を備える。(北京)

開発が進む「北京」

中国は、体面上の見え方を気にする、面子を重んじる国だといわれます。二〇〇六年のオリンピックは北京での開催。中国としては、この大会を何としても成功させなければいけません。そのためだけではないでしょうが、今北京では道路やホテル、各種施設などめまぐるしい勢いで建設が進んでいます。私が今まで生きてきた中で、これほど建設中のクレーンを目にする場所はありませんでした。

中国の街並みは、大通りから一歩はいると「胡同(フートン)」という路地があり、そこには昔ながらの家が軒を連ねていますが、その街並みが次々に壊されて、新しい大規模再開発が行われています。それは、成長を遂げる中国の豊かさの象徴かもしれません。しかし、東京オリンピックから高度成長期、バブル期に至るまで日本が行ってきたことを彷彿



人民大会堂 日本の国会議事堂にあたる(北京)

佛とするような気がしました。旧来の施設を壊し大きなビルを林立させることによって、胡同に見られる中国人のコミュニティが壊れはしないか、外国の文化を取り入れることにより、中国人のアイデンティティが希薄になりはしないか。日本がかつて失ったものを、今中国が失おうとしているような気がしてなりません。

今回、観光地だけでなく、出来るだけ中国人の生活感があるような場所も歩いて回



建ち並ぶクレーン(北京)

るようにしました。未だ残っている路地裏には、非常に貧しい人たちの生活がありました。トイレも共同で、水洗ではないため臭いが鼻につきまます。しかし、そんなことはお構いもなく、人々は食卓を囲んだり、椅子を寄せ合ってトランプに興じていました。一方で、一歩大通りに出ると、エリートサラリーマンらしき人々が革の鞆を提げスーツで颯爽と歩いています。貧富の格差が広がっているといわ

れますが、その姿を目の当たりにした気がしたものです。北京でどうして

天安門広場 面積40万㎡と広大 (北京)



毛首脳記念堂 中華人民共和国を創立した毛沢東の陸墓 (北京)

も見たかったのは、天安門広場。面積四十万㎡で、五十万人を収容できるというその規模もさることながら、一九八九年に起こった天安門事件の場所を見ておきたいというものでした。ちょうど、私が十六歳の頃でしたが、民主化のために蜂起した学生や労働者に対して、政府が戦車や銃で鎮圧する模様をテレビで見たことが未だに脳裏に焼き付いています。しかし、現在の天安門広場は若干の警備の人はいるものの、観光客であふれのどかな雰囲気を感じることがありませんでした。周囲には、元、明、清三代の



天壇 明・清代の皇帝が五穀豊穡を天に祈った場所 (北京)

王朝のお城だった「故宮」、全国人民代表大会などが開かれる「人民大会堂」(日本の国会議事堂に相当)、「毛主席記念堂」(私も遺体を見ってきました)などがあり、古から今日に至るまで政治の中心を担いつづける北京を感じさせられます。そして、もう一つ印象に残っているのが、万里の長城(表紙写真)です。長さは六千キロにも及ぶそうだが、秦の始皇帝の時代(現在残っているのは明代のものが多いそうですが)にこのような巨大な長城を作るといふ発想もさることながら、「月から見える唯一の建造物」といわれるように、その壮大さには仰天しました。



万里の長城 そのスケールには、ただただ脱帽 (北京郊外)



商業の中心 王府井 (北京)



北京の夜市 多くの人でにぎあう (北京)

歴史を感じる街「西安」



大雁塔 三蔵法師がインドから持ち帰った
仏像と教典を納める(西安)

かつて長安と呼ばれた古都「西安」。紀元前十二世紀から、十世紀初頭まで、二千年にわたって漢や唐など多くの王朝が都をおきました。また、シルクロードの原点としても知られています。やはり、歴史のある街だけあって、風格や重みを感じました。三蔵法師がインドから持ち帰った仏像と教典を納めるために作られた大雁塔や、秦の始皇帝の



鐘樓 西安の中心にあり街のシンボリック的存在(西安)

陵墓を守るために作られた「兵馬俑」など多くの見どころがあります。シルクロードの玄関口ともあって、帽子をかぶったイスラム教徒の姿も目につきました。



兵馬俑(西安校外)

美しい街「杭州」

「生まれるなら蘇州、住むなら杭州、食べるなら広州、死ぬなら柳州」といわれ、かつてマルコ・ポーロが「世界でもっとも美しく華やかな街」と絶賛したとされる杭州。「西湖」



西湖のほとりにて(杭州)

という大変美しい湖があり、そのなかにも「西湖十景」といわれる多くの名所があります。杭州は、緑茶の王様といわれる龍井(ろんじん)茶がとれるところ。私も茶畑を見に行きましたが、山肌に茶畑の美しい風景が連なっていました。また、忠国の英雄である北宋時代の将軍・岳飛がまつられている「岳廟」などもあります。



龍井茶の美しい茶畑が広がる(杭州)

巨大な近未来都市「上海」

最後に訪れたのが上海。中国経済の中心地ともいわれ、人口千六百万人を擁する巨大都市です。「ここが中国?」というくらい高層ビルが建ち並び、近未来都市の様相を呈しています。特に、私が宿泊した「浦東(ほとう)」地区はその象徴。アジア一高いテレビ塔や、八十八階立ての世界で三番目に高いビ

ル(高さ四百五十m)などがあり、現在世界一高いビル(何階建てかを公表するとすぐに追い越されるので秘密にしている)が建設中なのもこのエリア。今の中国経済の勢いを十分に感じることが出来ます。

滞在中、上海で働いている大学時代の友人に逢いました。日本からの進出企業向けに、システム構築を行う業務をしているのですが、相次ぐ進出のため作業がなかなか追いつかないほど忙しいそうです。街には活気があり、上海だけを見ていると近いうちに日本は追い越されてしまうのではないかとさえ感じます。豫園や、外滩など多くの観光スポットもあり、沢山の外国人で賑わっていました。



上海パブルの象徴 浦東(ほとう)地区(上海)